

所在地 宮城県加美郡色麻町四竈字東原ほか
立地環境 鳴瀬川南岸の標高 50～70 m の丘陵地
発見遺構 瓦・須恵器窯、須恵器窯、竪穴建物、
 整地層、土坑、溝
年代 8 世紀前半

遺跡の概要

日の出山窯跡群は、鳴瀬川南岸の周囲との比高が 25 m 前後の「日の出山」と通称される丘陵に立地する（第 1 図）。多賀城からは北西へ直線距離で約 25km ある。古くから多賀城の瓦を生産した窯跡群として知られ、その製品は多賀城・多賀城廃寺のほか大崎平野西部の城柵官衙（城生柵跡、東山官衙遺跡、名生館官衙遺跡など）や寺院（菜切谷廃寺跡、伏見廃寺跡、一の関遺跡）に供給されている。遺跡の範囲は東西約 1.5km、南北約 1.0km で、窯は A～F の 6 地点にみられる（第 2 図）。A・C・F 地点で発掘調査が行われており、窯場の様相の一部が判明している。このうち、昭和 44 年に調査が実施された A 地点の南西斜面については、昭和 51 年に国の史跡に指定されている。



第 1 図 日の出山窯跡群の位置

窯 調査された窯は A・C・F 地点各 7 基の合計 21 基ある。その構造は地下式 18 基、半地下式 1 基（C 地点第 4 号窯）、不明 2 基であり、大部分が直立式煙道をもつ地下式窖窯である。床面の傾斜角度は 10～30° 前後で、奥壁に向かって急になる。須恵器窯または須恵器を主体に生産した窯が 7 基あり、そのうち 3 基は煙出しの斜面上方に外周溝を伴う（C 地点第 2・5 号窯、F 地点西・SR1、第 3 図）。

工房 検出された工房は F 地点西斜面で 5 棟、C 地点で 14 棟の合計 19 棟ある（第 3 図）。主・壁柱穴による上屋構造を有し、斜面上方にカマドが設けられ、ロクロピットや粘土貯蔵ピットをもつ工房が 13 棟、上屋構造や斜面下方の壁が不明瞭で作業場としての性格が強いとみられる工房が 5 棟ある。平面形は前者が一边 4～5 m の方形が主体で、後者は長辺約 7～10 m、短辺 3 m 以上の長方形である。

窯場の様相

【A 地点南斜面】 昭和 44 年調査（文献 10） 本窯跡群東側の丘陵部に立地する広い南斜面で、4～7 m 間隔で並ぶ地下式の窯 7 基が検出された（第 3 図）。そのうち 6 基が瓦を主体に須恵器も焼成した窯、1 基が須恵器窯で、瓦は主に重弁蓮花文軒丸瓦 126（第 4 図 6）、二重弧文軒平瓦 511（第 4 図 7）、丸瓦Ⅱ B 類、桶巻き作りの平瓦Ⅰ A、一枚作りの平瓦Ⅱ A 類を焼成している。須恵器は C 地点第Ⅲ群土器の主体をなす坏Ⅱ C 類（第 5 図 11～13）を中心に出土している。

【C 地点】 平成 2～4 年調査（文献 4） 中央西側の丘陵南麓に立地し、窯 7 基、竪穴建物・竪穴遺構（工房）14 棟などが検出された（第 3 図）。窯 6 基が地下式、1 基が半地下式の構造で、焼成品がわかる 4 基は須恵器を焼成している。年代は、出土した瓦や土器から、3 期に分けられている。第 1 期は、8 世紀初頭頃で多賀城創建以前の工房とされる。第 2 期は、養老・神亀（717～728）年間頃（下限は天平 10 年前後頃）で、多賀城第Ⅰ期の重弁蓮花文軒丸瓦 114・122・133、二重弧文軒平瓦 511、平瓦Ⅰ A～D 類などの瓦 A 群や第Ⅱ群土器（第 5 図 1～9）の生産に関わる工房とされる。第 3 期は、天平

10 (738) 年前後頃で、窯はいずれも須恵器窯で、その焼台や補修に瓦B群とした細弁蓮花文軒丸瓦（第4図8）・均整唐草文軒平瓦（第4図9）、一枚作りの平瓦ⅡB類が転用されていることから、それらの瓦や第Ⅲ群土器（第5図10～22）の生産に関わる遺構群と考えられている。

【F地点西斜面】平成21・22年度調査（文献7・8） 窯3基、竪穴建物3棟、粘土採掘坑1か所、平場1か所、土坑などが検出された（第3図）。窯はいずれも地下式窖窯で、重複関係はない。瓦は主に多賀城第Ⅰ期の瓦でも後出的な重弁蓮花文軒丸瓦125、均整唐草文軒平瓦660、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類を焼成している。須恵器はC地点第Ⅲ群土器の主体をなす坏ⅡC類を中心に出土している（第5図23～36）。窯場は、粘土の採集から製品の成形と焼成、不良品の廃棄に至る各過程の遺構で形成され、遺構がほとんど重複しないことから場の使い分けが明確である。

【F地点東斜面】平成22・23年調査（文献8・9） 窯4基、瓦集中遺構1か所、溝2条、土坑4基などが検出された（第3図）。窯はいずれも地下式窖窯で、重複・位置関係等から同時操業は2基前後とみられる。瓦は主に重弁蓮花文軒丸瓦122（第5図1・2）・133（第5図3）、二重弧文軒平瓦511（第5図5）、鬼板950AかB（第5図4）、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA類を焼成している。須恵器はC地点第Ⅱ群土器の主体をなす杯ⅡA・ⅡB類（第5図1～4）を中心に出土している。平瓦Ⅰ類を主体として多賀城跡第Ⅰ期の豊富な種類の瓦と須恵器を焼成している。

窯場の変遷 本窯跡群は、多賀城第Ⅰ期窯跡群の中で最大規模で、操業期間が最も長い窯跡群である。窯場の様相をまとめた第1表をみると、多賀城創建から陸奥出羽間直路開削事業が行われた天平9（737）年前後頃にかけて、②段階の離れて少数で散在した各工程の遺構による窯場が、③段階のA地点のような大規模で集中的な形態、④段階のC地点とF地点西斜面をあわせた程の広さで瓦・須恵器を各々生産する形態に転化した様子が窺われる（文献11・12）。

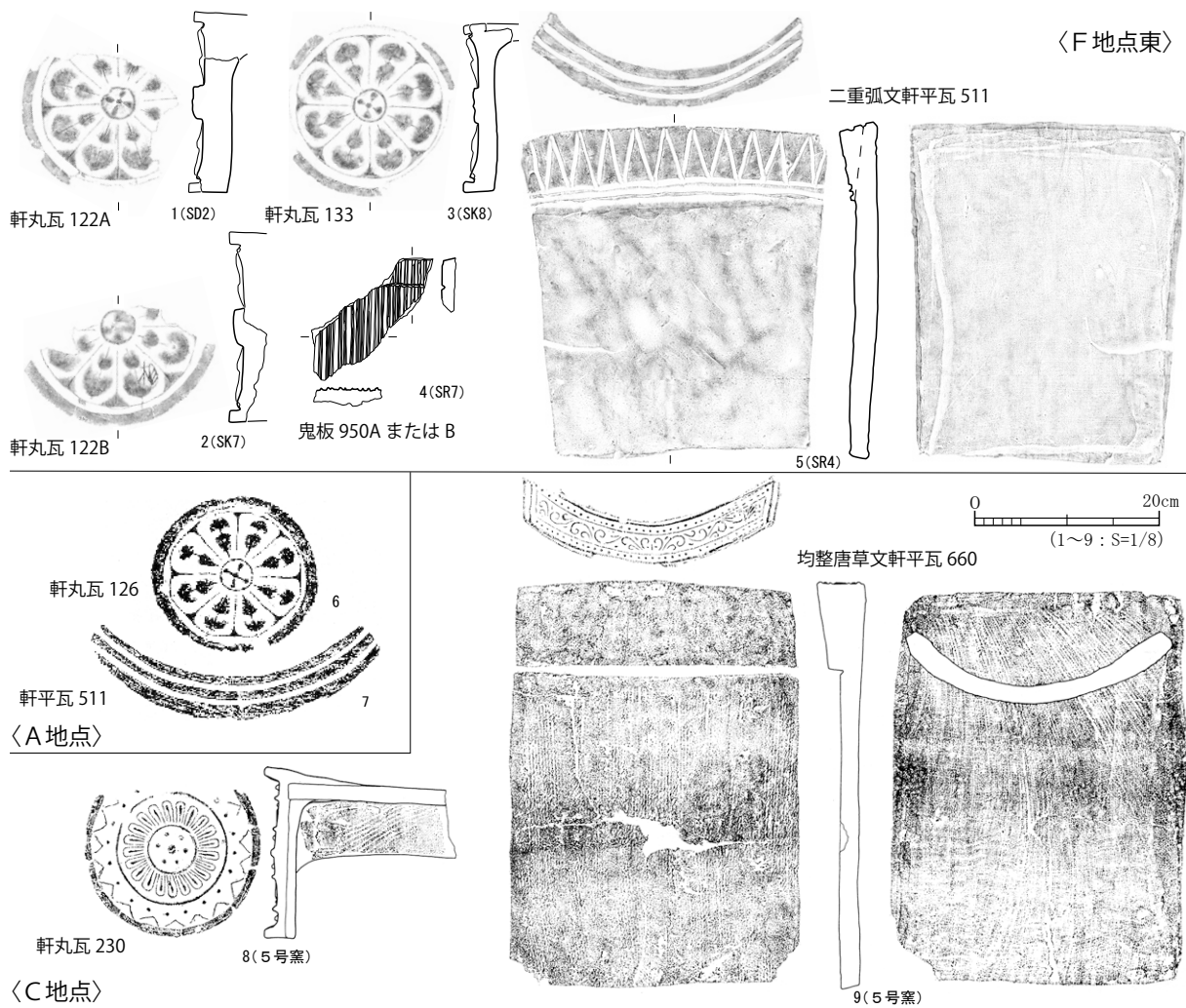
また、他の第Ⅰ期窯跡群との関係では、下伊場野窯跡群から調整台を携えた工人が本窯跡群に移動したこと、本窯跡群から軒丸瓦123と鬼板950の范型が大崎市大吉山瓦窯跡に移動したこと（文献9）がわかっている。

	年代	地点	主な遺構と窯場の規模	軒丸瓦 型番・様式	軒平瓦 (型番)	鬼板	平瓦
①	8世紀初頭頃～養老・神龜年間頃	C地点第1期	工房4				
②	養老・神龜年間(717～728年)頃～天平10年前後頃	C地点第2期	工房3	重弁114・124・128	Ia・Ib	二重弧文511a～c	桶巻き作り
		F地点東	窯3、須恵器窯1	小規模 重弁122・133	Ib・Ie	二重弧文511a～c	950AかB 桶巻き作り主体、一枚作り
③	②より後出。④より古い。	A地点	窯6、須恵器窯1	大規模 重弁126	Ie	二重弧文511d	桶巻き作り主体、一枚作り
④	天平10(738)年前後頃	C地点第3期	須恵器窯4、工房5	細弁230・231		均整唐草文660	一枚作り
		F地点西	窯3、工房5、平場1、採掘坑1	大規模		均整唐草文660	一枚作り主体、桶巻き作り

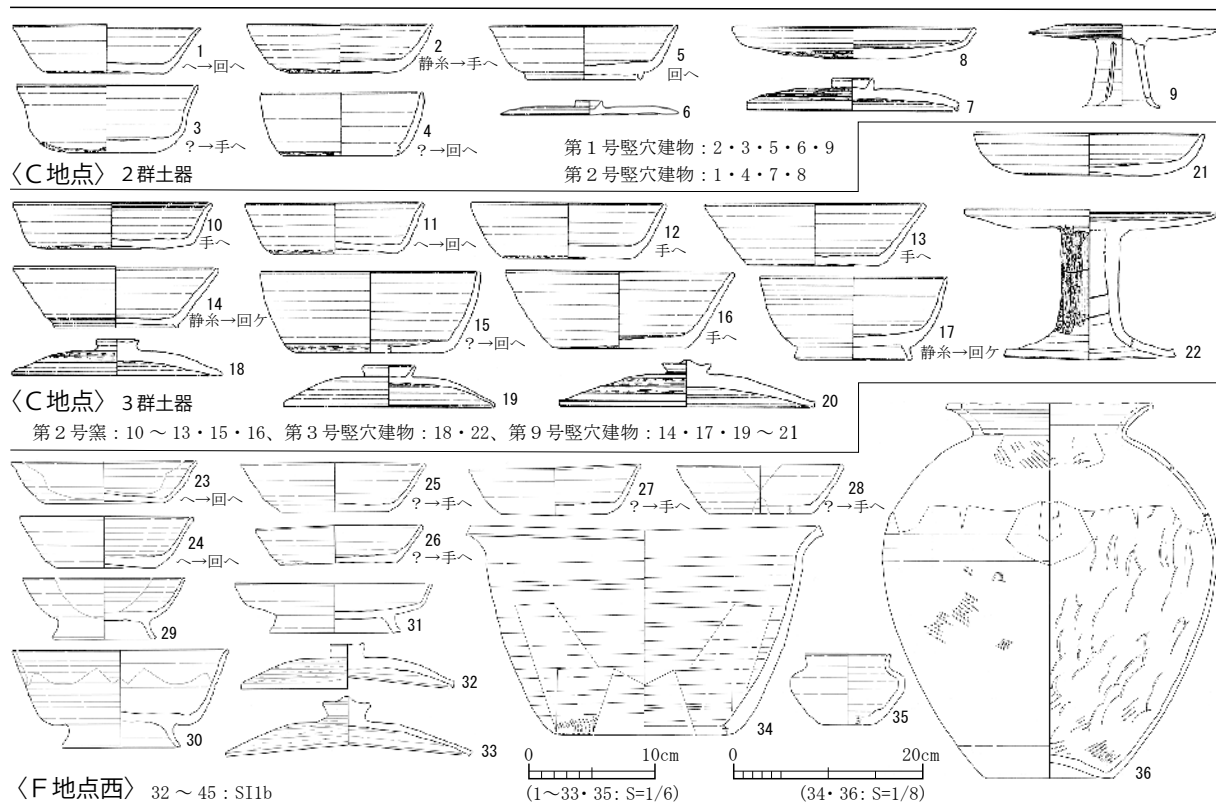
第1表 窯場の年代と概要（文献11・12を改変）

関連文献

- 1 櫻井友梓 2007「多賀城創建期の須恵器」『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室須藤隆先生退任記念論文集刊行会
- 2 櫻井友梓 2013「陸奥国府周辺の窯業生産地とその変容」『宮城考古学』第15号
- 3 東北学院大学考古学研究部「熊野堂遺跡」『温故』第14号
- 4 色麻町教育委員会 1993『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集
- 5 進藤秋輝 2004「多賀城創建期の造瓦活動」『考古学の方法』5
- 6～8 宮城県多賀城跡調査研究所 2009～2011『日の出山窯跡群Ⅰ』『日の出山窯跡群Ⅱ』『日の出山窯跡群Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第34～36冊
- 9 宮城県多賀城跡調査研究所 2023『大吉山瓦窯跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第38冊
- 10 宮城県教育委員会 1970『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集
- 11 吉野 武 2016「多賀城創建期の瓦窯跡一日の出山窯跡群を中心に」『歴史』第127輯
- 12 吉野 武 2017「多賀城第Ⅰ期の瓦窯跡の特徴と変化」『第43回 古代城柵官衙遺跡検討会 資料集』



第4図 日の出山窯跡群の主な出土瓦 (文献3・4・7・8より作成)



第5図 日の出山窯跡群出土須恵器 (文献4・6より作成)